みづほの史料

つゆ姫

Chinese Library
No.

蟬堂毛子

竹村

つゆ草の優にうろばしき姿に
は似もせでそがはかなくあえ
かなる色香こそやがてわが歌
の命なれもし薄運をいさほし
むが人の情のまことならばい
かにか花の心もうれしからん
を

せ蔵

人の世の秋風ふかばあえ
かなる花のいのちのもろ
くや散るらん

序
秀つ峰……一
双蝶の賦……七
寒玉音……一五
若水……二一
ゆく水……二四
車井……二七
朝霜……三八
夕逍遙……四三
飛火野……四八
殘紅……五五

乙女峠……五九
旅づと……六五
短夜……七〇
蔓草……七三
灯取虫……七七
青嵐……七九
秋袷……八七
行く雲……九〇
笠のあるじ……九四
挽歌一……一〇三
破れ蓮……一〇四
挽歌二……一〇八
大根引……一〇九
懐古……一一三
荒山徑……一一四
野調……一二四

つゆ草

みづほのや作

秀つ峰

口あきて歌ひてをれば思ひなき子等にも
似たりますらを吾は

ほつ峯を西に見さけてみすずかる科野の
みちに吾ひとり立つ

正宗の白刃ぬきもちをたけべばわが双の
手もちからありけり

秋風のふきのまにまに飜へるひと羽の蝶
を見てぞわが立つ

久方の天路しらする威の神の征矢のひび
きに立てる秋風

天地の秋をうしはく神わざの太刀のい振
りに立てる風かも

秋川のすみたる水に船やれば底の砂子の
とびても行くよ

谷川のさざれに交る白き石を秋の女神の
かざしとか見む

その市を西にさかりて川をこえていづく
に行かす君にかあるらん

草を出でて穴にかくるる蛇のおもかげさ
むきあきのかぜかな

この國によき名を負ひて生れこしよき子
を守れ白妙の鶴

松青く江の水清き明け方の砂子をふみて
白き田鶴立つ

このゆふべはたまた雪に物ぞおもふひな
の旅路に鐘遠くして

淋しくも暮るる空かな旅にしていかにと
いはん友もあらなくに

太刀なでてよわき心になきもしつ故郷と
ほきともし火の前

聲立ててこのさみしさをつげんかも灯影
ぞ見ゆる友の家の窓

松杉の木立の奥に家をれば こぼれ落ち葉
や窓の友なる

北の海ゆい吹き渡らふよるの風に村雲な
びき七つ星見ゆ

更けゆけばたほとなぶらもまたたきて廣
間の床の花もほろほろ
さみしさの外に伴ふかげもなしひとりす
むやどのともし火の前
千よろづの甍の上を月てりて大都路を小
夜ふけ渡る
この川のあらきにいます瀬の神のみ魂の
牲と眞玉ささぐる

ふる寺の庫裡にすくみて教へ子を教へて
あれば年はくれたり

双蝶の賦

咲き匂ふ春の花野
美しやさ青の草葉に
女の神か忘れていにし

白き紅き花のいろいろ

いたいけの葉陰の花の

さゆらぎにゆらぐを見れば

心なの風のそよぎも

おもいある姿なりけれ

さそひしは花かあらずか

吹く風か風かあらずか

この小野の花の草生に

迷ひ來し胡蝶のつがひ

こちごちの花を尋ねて

そこに分れここにあひつつ

睦しく舞へるすがたよ

天つ女の袖もさながら

羽なめてひと木の草の

花の面にささやぐ聞けば

忍びねのこひものがたり

なれもはた思ひありけり
白妙のあや羽うちふり
さしよるは雌にしあるらし
うれしとやこれもやさしき
雄の蝶の羽をうごかす
口あてて口に吸ふ蜜
甘からしかたみの胸に
湛へたる戀のながれの

あたたかき露のしたたれ
死せるごと羽かいたれて
かすかなる息の通路
ああともに抱きすくみぬ
いかばかりあへる魂ぞも
むすびては天の眞名井に
岩をしき神もぬといへ
人の世の花の園生に

今暫しゆめぢのやすさ

＊　＊　＊

若草のもろ羽の風に
たち聞けば歌ぞ聞ゆる
やややにちかよる聲は
年若き子等にしあるらし
春しらす神のわらはが
花をつむ野邊のあそびか
ひらひらと風のまにまに

四つの袖ひるがへる見ゆ
歌ひつつかたりあひつつ
睦しき女男のなからひ
かぎろひのか行きかく行き
低く高く音もいざまふよ
幻のゆめのさかひに
なり出でし蝶かあらずか
蝶の身の人とかはりて

なり出でし影かあらずか
今暫し歌もとだえて
日は西に雲にかくるる
夕影のしげき岡邊に
合歡の森梢もねぼろ

ほの白く花はあれども
舞ふ蝶はあともとどめず
たけ高き草の葉末の

いづくにか影は消えけん
あやなしと花にいこへば
星一つ見えてかくれて
ゆふやみのそらの上ゆく
かすかなる歌の一ふし

寒玉音

君をしも伴ひたてて旅ゆかば野山の神や
われをねたまん

木枯のふきのすさみに聲たてて山の尾上
を木の葉とびゆく

石狩の川を行き暮れなづさへるアイヌの
船にあしの花ちる

瀧の邊のゆづ岩村のかしのはの濡れ葉の
上に雲のとどまる

おちたぎつ瀧のしぶきにとこぬれて立て
らく松は命死なんかも

瀧の邊のいはほに立てる一つ松まつのぬ
れ葉につゆの玉ぬく

山姫が大機たてて織る布の梭の行き來に
木の葉かつちる

あし引の山田の案山子さよばひに野邊の
うさぎの月にたちくる

ぬば玉の夜をしもいねずありたたし案山子はたれを戀ふにかあるらん

茸狩るとあともひ來にし子供等のこゑのとよみに松葉こぼるる

ゆく水の川音さやけみいかにいかに碎くる如きおもひかすらん（以下七首友人の故郷を離れて田舍にこもれるに）

別れ來し敎へ子たちをよすがらのゆめにし見つつやすいせぬらん

すすけたるいほりのすみにうづくまる君をしおもへば涙ながるる

天なるや神のみ園を追はれ來しアダムの如き君にやはあらぬ

はろばろに家さかり來て秋つくや田居の伏屋になきてかあるらん

新妻のうつくし妻の玉手まきねしよ思へか君のさもしき

この岸にさきくといへば彼の岸にさきく
と友もふり別れゆく

れそろしき車の音に目を閉ぢて小さき子
等はただ驚くよ

今出づる汽車のうごきに喜びて小さき子
等は小さき手をあぐ

うらぶれて世の憂き旅に迷へばかさてし
も人の戀しかるらん

若水

ほがらほがら明け放れゆく大空のいづく
よりくる年にかあるらん

このねぬる朝げの風のひと吹きにやまと
國原年立ちにけり

ほがらほがら明くるあしたの空の色にた
ぐひて年も立ちかへるらん

年は今立ちかへるらんわだつみの波のほの上に日はいでにけり

とこよべの長なき鳥の一聲に天つ日の戸は明けそめにけり

おほぎみをあやにかしこみ天地の年の初めにことほぎまつる

新玉の年のはじめはとほぐほし日向の國の古へおもほゆ

くれはとりあやにかしこみ大君を祝ぎまつるすべも我は知らなく

谷ぐくのさわたるきはみ大君のしらすさかひに年は來にけり

みはるかす四方の國原烟立ち大君の御代の年ゆたかなり

いたいけの片手かざして笑める子のいくつになりし年にかあるらん

松やくと集へる里の子供等のうたへるう
たはをかしかりけり

ゆく水

ゆく水はやき谷川の
流れの岸のかくれがに
君をよすがら思ひねの

夢の行くへのあとを追ふ
夢にうつつにたえまなき
君のすがたをれもひては
れちてながれてゆく水の
淵にうづまく物れもひ
岩瀬の水と身をなさば
彼のうたかたと流れゆき
掬ぶや君がくれなゐの

濃染の袖に消えましを

あゐ白雲の山にゐて

我はねをなく空のとり

流るる水よ心あらば

かくとはつげよささやきて

燈火くらき閨のうち

耳そばたてていちきけば

杉の葉渡るさよかせの

荻にしほるるひとふきや

岩間ゆく水聲たてて

ささやき顔にながれゆく

車井

車井きしる垣の内

内をゆかしみ垣間めば

手拭姿くろかみの
かざしの玉は榮ねねども
両頬豊かにゆゑづきて
ふくよかなりや君が面
釣れば車のからからと
繩もつ小手も肥ねたりな
井桁に汲める桶のみづ
つげの小櫛を手にひてて

心化粧の水かがみ
鬢のさがりのうつくしや
君あたたかきむねつぼの
甘露の酒はさもあれや
飢ねて渇けるわが喉に
まづ其の水をうそがずや
情なき世の道行きに
傷つきなやむ旅のもの

暫し木下のそでふれも
えにしのはしときくものを

君よ無情者さかしらに
はやも逃ぐるかああうたて
なぞさはせくよ水桶の
惜しき雫のこぼるるに

友の家のたか村しぬぎふる雪に灯影よろ
しき軒の丸窓

ひさにあはぬ友も來りておもしろき日の
ゆふぐれを雪ふり出でぬ

みそさざいまれに來てなく裏町のさぶら
ひやしき雪ふりにけり

人の子の酒を求むと走りゆく町の塲末を
ふる粉雪かな

磯崎の松の一木の雪をちらしわだつみの
海に田鶴かけり行く

やみてこやす母ありとおもふ故郷に雪な
さそひそ山れろしの風

わだつみの沖のしぶきに磯崎の並木松原
雪ちらふ見ゆ

やわらかき春の歩みのあととめて野山の
雪はきえ初むるらし

長野はわが第二の故郷なり
そか山川の中などかれもひ
出のくさはひながらん

ちまたぢの柳ふきとく春風にをとめが髪
ものびやまさらん

おきてこし長野のをとめ春風に思ひうら
ぶれてわれを待つらん

よそに見てすぐべきものを藤の花などか
ゆかりを袖にふれけん

谷の巣を未だたちわぬ鶯のひいなの如き
君をいかにせん

おぼろおぼろかすむばかりの燈火に見れ
ばいよいよ光りある君

けふ來ばとよみておきつることのはも萎
れやすべし君待ちがてに

いはけなく罪なき君のこころより戀は尊
きものとなりぬる

罪しらぬ君をかしこみうちつけにいひ出
でがたき戀もするかな

立ちよりて折らんと思ふ心さへ清き花に
はなほたゆみつつ

誠ある君とわれとの戀幸をむすぶの神も
まもりますらん

科野ゆく木曾の旅路に求めつるつげの小
櫛よ妹にささせん

來ぬものと思ひ果てにし恨みさへあへば
あとなく忘るるものを

かぎりあれば別るるものをなごさはふかくは思ひけんさてもその別れのつらかりき

歸るべき家路はあれど君をおきてゆくべき方に迷ふなりけり

見送るとて滝車の外に立つ我が妹の鬢の毛をふく市の春風

つれもなく置きてしいなば世の中にひとりや君が思ひよわらん

思ひのこしかくて別れていづくにか我が身はつひに行かんとすらん

君をれきて旅路のくまに迷ひなば思ひたつともかひやなからん

なれもはた物をや思ふひとり寢の枕によわきともしびのかげ

流れゆく水をとどむるすべもなし小野の
川瀬のひともとやなぎ

朝霜

鐘寒きみ寺の庭の朝霜に白玉椿こぼれて
ありけり

八千矛の千鋒の杉生こだまして山の八つ
尾を鐘なりぞよむ

君が手とわが手とふれしたまゆらの心ゆ
らぎは知らずやありけん

きさらぎの空ゆく雲を指さして春ならず
やと君にささやぐ

とりよろふ筑波の山の女男山のなぐはし
やまやまづかすむらん

佐穂姫の裾長衣つちにすりて歩まずなべ
に春たつらしも

みたらしのみ池の水は青にすみて橋ゆく
ちごの美しきかな

紅の衣をつけて猿ひきて都をゆかば妹に
あはんか

酒壺にさくらの花を折りだめてをしや琴
なき宵をうらみぬ

その橋をわたりはつれば柳ありて酒うる
店の旗ひるがへる

菜の花にかすみて小さき野の寺に春の湿
槃の鐘うちしきる

古寺のかべに染めたる紅筆のこひうたう
すし春の雨ふる

かすみ立つ長き春日を妹まつと見さけた
ちけん岡のはりはら

妻ごめに家居つくるとささがにの乱れ榛
原春の草切る

汝が髪の濃さをめでて梅つ神春花かつら
かづけけらしも

門川もひびきをかへよ天地の春しる神は
今たたすらん

上野山杉生のうれに一刷毛をいろどりす
てしうすがすみかな

さえさえていまだかすまぬ山本のあらら
松原あは雪ながる

あさもよし紀路のとほ山うちかすみちぬ
のうみべに春來りけり

夕逍遙

足曳の山のたをりに
しみ立てる檜木松の木
見さくれば雲に入り立ち

いつかしや天路をそそる
朝雨のいのちに浴みて
みどりなす梢のもろ葉
うす月の雫に濡れて
黒髪のよそひもよしや
その幹を流るる血しほ
くれなゐの色に染めねど
か細げの身をしたぎちて

ことはの思ひや宿す
疾き風にわななく叫び
をたけびの思ひは何ぞ
夕暮のくものはた手に
ささやきの聲も悲しげ
耳たてて聞けどわかず
たもとほり夜をさ迷へば
木木の香の眞柴のにほひ

衣手にしみこそわたれ
なつかしや同じいのちの
木に似たるすくせなりけり
わびしさに幹をかいだき
いきづけばああこの胸に
ああ胸に
通ふ血しほの
あたたかき

波におぼろく
うたてさの人に交れば
なさけある友もえあらず
ああわれはかくてかれなで
木とともにこの世はへなん
さはれなぞ時の流れに
これもはた久しかるべき
よしさらは冷たき石の

心なき世をしのがれて
木とともにほろびくだけて
谷かげのつちにかへらん

飛ぶ火野

窪田うつぼの奈良に行くといふに
よみて送れるされど行かずうたの
みひとり残れり

青によし奈良山をこえいかさまに飛ぶ火
の野邊を君ゆくらんか
やまとべの國のまほらに神さびて今も殘
れり奈良のふるみや
青によし奈良の都は神さびて山もそそれ
り川もめぐれり
青によし奈良山こえて行く君につつがあ
らせじとわもふ旅かな

よろしめのすむてふところあをによし奈
良の都に君をやるかな

君が身に幸ほかれと尾張田の熱田の神
ををろがみまつる

かくしつつわれは老いなんしかれどもか
しこき君のただにすぎめや

汲みかはすうたげのうたも心地よし君行
く方に幸多からん

○

青柳のかげふむ駒のいななきに有明月夜
しらみそめけり

敷栲のまくらに殘る髪の香に妹をぞれも
ふひとりしぬれば

若草にいこひころぶし南行き北ゆく雲を
ひとり見るかな

ひきさして空をながむる歌姫の片頬に月
の影ねばろなり

みやしろの神もいでてやわそぶらんこの
朧夜の梅の花園

たまたまに星見ゐ初めて谷かげに梅の花
しろく家まばらなり

ただならぬゐにしにもあるかなここに來
てかかるすくせに君とともに泣く

あぜけなく歌ふを見れば鶯のひいなの如
しうなゐ子なれば

とひこもり佛をきざむ木匠のみあかし暗
くさよふけにけり

友とともに友の妹の墓に詣でけるに
あたらしき土にはやくも菫など咲き
て松の葉松の露ともにこぼれ落つ

とひ來れば松のつゆふり松葉ふり涙ぞ落
つるおくつきどころ

妹のはかにやさしき一本のすみれの花よ
つまでやみにき

かたはらのすみれをほりて植えてやりぬ
まだわたらしき妹のはか

たらちねの母の菩提寺この寺の佛の前に
花奉る（寺は吾が菩提寺なり）

殘紅

ゆくりなき寢覺の床にれどろきぬ蘭の香
高き室の小夜風

鉢植えの蘭のにほひもただならず林の奥
の君がやどころ

このねぬる朝げの風のふきのまに山下庵
蘭の香ぞする

鉢にうえて見つつしをれは肝向ふ心ぞき
よき蘭のしだりば

山陰のすずろありきぞ心地よき松の露の
にほひ蘭の香の風

足曳の山下どよめますらをのこの春の日
を馬ぎほひする

水鳥の鴨の羽色の青馬のあがきをはやみ
風ふきおこる

あし引の山にこたふる山彦のをたけびの
こゑに木木の葉さやぐ

あけ放つ五層の楼の大廣間つばめ舞ひ入
りぬ青あらしの風

聲たてて妻覓狂へるにはとりの羽の上毛
に春雨のふる

妹がすむ堀川あたり梅さきて吾が行くよ
るを月おぼろなり

いでや君ゐぼろ月よになりにけり品川あ
たりそぞろありかん

梭のねのきこゆるあたり妹が家の二本杉
に月かたむきぬ

子等は皆歸りはてたる學びやの青柳の糸
に春の雨ふる

暮れて行く春を惜しむと外に立ちて風の
行方をながめやるかな

藤波の影さす春戸の川水によぞめる春も
くれてこそ行け

乙女峠

夕立はやきするが路に
簑かる家もなき旅は
菅の小笠ぞ身を入るる

たのむのかげの宿りなれ

相模に近くはしきやし
今も名に負ふ乙女山
けふわが越ゆる峠路の
道は昔のみちながら

裳裾ひく子の足まとひ
足にふまれてなびかひし
小草ははやく枯れはてて

昔をかたるかげもなし

山をはさみて今もかも
ならびて住める里二つ
そこにみめよき里の娘の
住みてありしを見初めては

世になき玉どこの里の
若きがおちず通ひしを
ひとせ春の末つ方

ふと通路はたゐにけり
さてもありゐずをとめ子は
かよわき脚に山をこえ
いゆきて見ればあなうたて
君は病にさぬてふに
とはでは胸のおちゐぬに
夜毎通ひてなぐさめど
かひこそなけれすでにして

魂はその身をさかりけり
八十の夜こめて思ひしも
つひのすくせはかかりけり
しかじこの身もろともに
飢ゑし魔神の贄とせん
胸せきれつるをとひめの
涙は草をやくといへ
かくと定めしをみな子の

心よいかにつらかりき
木暗の澤にものすごき
池はさ青によどめども
底にただよふ玉藻草
人の命のいまいづく

結ぶわらぢの紐とけて
越ねこそなづめ雨の山
峠の草にふりそそぐ

つゆや涙のここちして
小笠かたむけ見かへれば
峯ははるかにさかりつつ
今はた迷ふあまぐもに
こちごちの木の見ねがくれする

旅つゞ

とのぐもり淺間も見えず上つ毛や旅の心
を何にやらまし

さ走りに瀧車すぎゆけば瀧車道のもろ草
なびき風ふきおこる

岡もさり里もさかりてたのしき森君が家
居も見ねずなりけり

ふもとゆく馬子が小笠もふかれけり青葉
の山の山れろしの風

ねにしあれば乘合船に知らぬ國旅の君と
もかたるなりけり

かいとりの舟子のさわぎに夢さめて眺む
る山の青葉若葉かな

ゆふばえの海の歌かく眞砂路をあらひて
去りしさざれ波かな

大汐はゆたにさし來て芝はまや渚の杭の
波にかくるる

そぞろありき品川行の瀧車にして朧月夜
の梅を見るかな

れもかげに今もかよひて忘られねただた
まゆらの瀧車にあへる君

五月雨はけさまだやまず朝戸出の瀧車の
烟はふ里の早苗田

れほ空はみどりに晴れて上つ毛や武藏國
原麥の穂なびく

蕨折り岡越ゆくれば家ありて武者繪のの
ぼり風にはためく（途上五月節句にあふ）

世に惜しきオある君のすまゐにはくやし
とおもふ草の中の家（藤村うしの小詩義塾を見て）

そめぬける君がゆかたのあやめ草さめや
すき色の戀はわがせじ

白妙の襟にそみたる口紅を友もし見なば
おもなかるらん

植ゑごみの樫の葉がひに見ゆるかな竹屋
わたりの船守るやど（隅田川にて）

碓氷嶺のトンネル出でて滝車の窓に關の
東の國原を見る

短夜

別れ來てはるかになりし君がやどの木立
をすぎてゆくほととぎす

君に別れ野を分け來れば朝風に草もみだ
るるつゆも乱るる

ここにして左に見ゆる竹村の笹の葉がひ
の家居しおもほゆ

今はとて柳の糸を手にまきて笑みしおも
わの忘られなくに

忘れじのこのやまとうたよ誰が爲めにあ
りてかひある言葉なるらん

有明の月はかくれて卯の花のほのめくか
げになくほとときす

明け初むるあしたの空のむらさきの色に
咲きたる花あやめ草

栗の花かつ散る軒に傾きて夏の月夜ぞし
らみ初めたる

この朝げふるとも見わぬ五月雨に庭の薔
薇の花かほるなり

蔓草

十歩の小畑せまけれど
培へば生ひ立つはたの物

莢もみのりて豌豆の
丸葉ははやく枯れたれど
勢よしやゆふがほの

夜つゆに浴みし花の笑
かたへにふとき唐茄子の
廣葉がくれに咲く花の
黄なるは胡瓜其の陰に
ありとしもなきなすび哉

葉守の神のみ手の中に
ひめし小琴を夕ぐれの
風の一吹なでゆけば

なるか畑緒のさやさやと
さこそはつらき身ならまし
思ひをかたれつる草の
われもすくせは悲しきに

薔薇の花と咲かざれば
やさしき姫の手に摘まれ
よるの腕に抱かれて
口に親しむ術もなく

山路の蘭のしだりばの
清き姿もなければか
汝はとこしへの春戸の畑
土に生れてつちに枯る

同じく人と生れても
幸は變れるこれとかれ
夕暮杖を外にひきて
われも思ひを草にやるかな

灯取虫

春戸の芋の葉かぜ過ぎて
ゆふべ涼しき窓あかり
ひるの暑さに苦しめる
虫も葉かげに羽をのべて
やさしや里に灯をあさる
花ほの白きゆふ顔の

葉陰にひびく歌の聲
娘糸くるまる窓に
翅やふれし婆娑として
障子にすがる灯取虫

小蜘蛛糸ひく芋畑
葉陰の闇をいとふとて
薄き光のまどにより
よすがら影を戀ひ慕ふ
虫の命ぞあさましき

野邊の夜つゆを身にあびて
花に醉ひふす虫の歌
かくしもあらで汝のみは
なぜ身をてがす火の責の
なやみの門にかけり入るらん

青嵐

夕立のつゆにぬれたる松の葉をふきなび
けたる青あらしかな

こもらさす葉守の神よいかならん風交り
雨のしとど降り來ぬ

夕立のつゆこき垂れてこの庭の一木の松
の目にきよきかな

たたなはる青垣山の岩疊おちたぎつ水の
清くもあるかな

渚ふく夏の海邊の涼風に妹か衣の裾ひる
がへる

一筆の墨繪にかける丸木橋いかづちの子
の雨にとびゆく

たらちねの添乳に眠る小さき子のゆめぢ
を守れねを鳴く蛙

女を咀ふ大龍神のいぶく息に七つの色の
くもたちさわぐ

秋の日は入江に落ちて海の上を一かたまりの黄雲いざよふ

百たらす八十のとぐるま雲にすゐて天路をかるか火のはたた神

五月雨は今ふりやみて青草の遠の大野を雲歩みゆく

海に添ふて續く並木の松が枝に沖よりい吹く青あらしかな

ひとしきり高根のあらし吹き落ちて谷の眞菰にたちさわぐ見ゆ

おのづから水は流れて渡し場の船に人なしあしの花ちる

峠路の並木を出れば北の方越の海路のいや廣に見ゆ

奇峰は日本派の俳人なり風丰洒脫頗る飄逸の態を演ず而も

も衷情最も熱烈常に吾が畏友
たり此頃初めて男の子生みた
り喜べなどいひおこせたるに

君が子のををしかれとて青雲のみ空みさ
けて桑の弓射る

いたいけの其の右の手に男神いましその
左には女神ますらん

うるはしき家のさかゐをよろこびのまと
ゐとなすは子にこそありけれ

奇峰兄双親なほ鑢鑠たり

生れつる其の子の親もその親のその父母
もうれしかるらん

君か子の清きにめでて守るらんあめなる
星の八百萬の神

よる光る玉といへども父母のみ手の中な
る子にしかめやも

都なるうつぼに便りすてて
其のふみのはしに

淋しくて君もれはさば秋の夜の此のれと
づれをうれしとおぼさん
語らはん友しなければ文机のふりたる前
にひとり物おもふ
思ひいでよ別れてのちは信濃路に月見る
友はひとりなりけり

秋　袷

見送りし小笠も見えず青草の野をおしな
びけ秋の風ふく
ひとり行く旅路の君や先づ聞かんこのゆ
ふぐれの秋の初風
天の川かたむきかけておほぞらの西の果
てより秋はきにけり

身にしみて淋しかりつとおもひつる夕べの風は雨となりけり

別れ惜むたなばたつめの袂よりたちけるものが秋の初風

打ちさやぎ川瀬の小野の白楊原なびくを見れは秋きたるらし

箱根山出で湯めぐりのかへるさに秋なく虫のこゑをきくかな

故郷の萩の袖垣いかに荒れてさそな野分のやどとなりけん

わか春戸の古井の萩にひとしきりさわぎし風のいづちいにけん

小木曾路は衣手さびし旅人の笠吹き越ゆるあきの山風

山にせまる小さき萱屋の小庭先椎の木の實のたえずこぼるる

あきされば古井の軒の一本の若樫の實の
たえずこぼるる

行く雲

ゆくくもを見送るなべに其の雲の行方も
わかず日もくれにけり
ながめやる雲の行方も見わかずあああ
あ悲し夕ぐれの空

逢へばはたことなきものを白雲になぞさ
はものの戀しかりけん
けふばかり時雨なふりそ思ふ子の初山越
のわびしとおもふを
うたたねの夢にも見つる今宵だに來まさ
ぬ君をいつとか待たん
いとせめて夢路にだにも君を見んさなこ
ゑたてそ荻の上風

ふきたゐて後こそいとどさみしけれうき
ねの床の荻の上風

さらでだにさびしき秋のこの頃をなれに
別れていかにすぐさん

いとせめてうれしといひて別れましなげ
くもかひのあらじとおもへば

かくしつつ厭ひもかねて徒にふるも久し
き我が世なりけり

あまたあるみそらの星のいづれをかわが
ゆふぐれの國と定めん

見ゐ初むる西のは山の一つ星何とはなさ
に人のこひしき

手をとりて妹とながめしうぶすなの森の
こぬれのその一つ星

何となくうれしかりける夕ぐれの景色に
似たり君や來まさん

かかる夜に君は來ませり打ちいでて眺む
る山のゆふづつのかげ

笠のあるじ

星合の空たなばたの
ゆふ月夜こそ朧なれ
さやかにうかぶ思ひ出に

今はた胸をいたむるよ
碓氷を西に六十里
くしき湯ぞ湧く山の陰
日記にしるせる白骨の
名はうとましく思へども
やさしかりけるかの人の
今に忘れぬ旅やかた
なごさは深き戀幸を

神はもいとひ給ひけん

年は十六名はおさよ
頬にふりかかる黒髪や
鬢茎高くふくらみて
人なつかしき風情かな

世にたづきなき根なし子を
いとしとわれも思ふから
つめばしはるるつゆ草の

花のゑまひのつらかるに

せめて情ある人の世の
土にねざさばはしたなき
人の子ながらおよすけて
花さく時もありなんを

たなはたつめの世なりけり
空高らかにくもはれて
南に渡すあまの川

星をかぞへてありたては
秋にしるき初秋の
空吹き落つる風の音
耳にささやぐさやぎこそ
われをよばふに似たりけれ

湯の氣にかすむ空の色
心げさうのすがたかな
我が手にすがれをとめ子よ

なごさは指のをののくよ
昔語りやいまの世の
辛ある身をし嘆きつつ
月の光にさまよへば
袖こそつゆに濡れとほれ

ああああやさし手をあてて
聞けは血の湧く胸の中
人の子なれや汝もはた

いつ迄うすきえにしなるべき

神てふものの世の中を
見たまふきはみ汝とわが
かたみに祈る戀幸よ
さきくてとはにありぬべし

語れはよわき女氣に
はやもむせぶかああ悲し
吾はますらをしかれども

もろくも汝にまけにけり

年は十六名はれさよ
かはらぬ末をちぎりつつ
ふり別れこし安曇山
山のいでゆのなつかしや

四年を越えて今宵はた
めぐりて返る星合の
空なつかしき秋の風

物思ひつゝゆく道に
ふと見しあまり何となく
あまり似通ふ面ざしや
くゞもりかちに唄ひゆく
歌の念誦のあれ聲が
「聲がよう似た唄聲が
うたが聞ゆるあれ何唄ふ
市の燈火夜風にゆれて

笠のあるじの頬が見ゆる」

挽　歌（一）

をしとれもふ花の色香をいつよりか春の
女神はにくみ初めけん
をさなくて辿るよみぢぞもろもろの神よ
佛よただ守りませ

みな人の惜しとれもふ花を春の風いかな
りしより吹きやちらせし
さりともと思ふ心にうつし繪のかひなき
かげも眺めこそすれ

破れ蓮

淺澤の小野の忘れ水末はいかなる瀬
にか流れ合ふらん

ふもとゆくいさら川水たまたまに名もな
き草の花にふれゆく

あきつとぶ門田のくろの稲掛のかなたに
青き小筑波の山

ながつきの秋風吹けばつゆをいたみ桑の
さき葉のややに色づく

日は西に入江につづく村あしの穂並の末
に海見ゆるなり

たたなはる山むらさきにくれ初めて牧場
の草に笛のねたこる

牧童の笛のね低く日はくれて影地に長き
小羊の角

み祭のゆにはに集ふ女のちごのいづれを
神はうれしとねぼさん

み祭の宮本にせすと奥山の大木の杉をね
こじもてくる

まさやかにはれたる海のをちかたももろ
こし船の旗の見わくる

足弱の神子の蛭子を沖へやるとうなびの
水門に小船うけたり

わたつみの海のぬす人船作ぐと島の大木
の杉を倒せり

まかぢぬき鳴門を行けば青浪のしぶきの
風に小船かたむく

挽歌（二）

今も尚目にこそうかべ酒のみて笑みかた
まけし君がれもわの
うつせみの世に惜しき迄世の中に秀でし
才を神やねたみし
日にくだる世人のさまをいとほしみいに
けんものかあまつ神の子

よに惜しき清き心の君にあれや神も佛も
あはれとれもひし

大根引

世をさけて里にこもれば大根引をかしき
歌も耳なれにけり
猿引きて旅に迷へる藝人の袂に寒き木枯
の風

ここにたれすむ人ありて森陰の氷れる池
に水はくみけん

忍ふ夜のよ風をいたみふたあゐのなほし
の袖にちるもみぢかな

小夜ふかく寝息をはかる盗人のみあげし
空に星又とびぬ

川ぞひの榛の木原は落葉して水車屋も指
されつつ

此里に菜洗ふ少女家とへばさして教へつ
森かげの道

岩をめぐる川波はやしその岩の松の一木
にふくあらしかな

心地よき添乳のうたに其の母の子もねむ
りけり母もねむりけり

幼くて出でたる道に逢へりけりこれも旅
なる姉に似し人

やみてぬる友の面影見ればかなし見ねば
ものうし君をいかにせん

やみてぬる病の窓にふきおちぬ外山の萩
に秋つぐる風

見あげたる君がまなこの著くよわれる見
れば涙しながる

ことことしくるわ通ひの小車をみそかに
やらんすべはあらじか

懷古

平の宮うつらしますといでていにし御幸
の伴のかへる時なく

敷きませしこちごちの宮野となりて蜘蛛
心なし春の風ふく

さゞ波や大津の皇子がかくりこのま木立
つ山をみればさぶしも

みよしのの瀧つかうちにふとしきてたて
し宮居のただ碎けけり

荒山徑

春戸の細道荒れ果てて
ふみ分けがたき草よもぎ
樋口はたえて車屋の

井堰は早く碎けけり

草と草とをひきむすぶ
心細げのくもの糸
ふめば足音に驚きて
にげてかくるるねづみ哉

戀と希望にはぐくまれ
笑みて遊びし古への
樂しき園はとくあれて

夢の末吹く風悲し

昔「エデン」の御園生に
「イブ」と「アダム」の親みも
かくやはとこそちぎりしか
人の命のいまさらに

清き君には惜かりき
水車屋の粉娘
朝夕べのうすのねに

夢もさながら碎けては

寢覺の床に人知れず
鬢の毛をかむ物思ひ
ひそかに胸に手をあてて
あつき血汐にねぢけらし

ああさばかりはやさしくて
うるはしかりし君ゆゑに
吾も息の緒に慕ひつつ

君があたりに靡きしを
波になづさふ若葦の
旦暮水を慕ふごと
君をはなれて玉ゆらも
吾はありねぬいのちかな
をかしからずやかかるとき
吾が子を富の贄として
黄金の前にうきぐもの

あとれふ親のあらんとは
くやしからずやかかるとき
名も無き野邊を歩むとて
吾が手の中にひめもてる
寶を道にすてんとは
寶なりけれ君こそは
かしこき胸の藏の戸に
立つとはすれと誰ありて

秘密のかぎを開くべき

ああわあ吾は早くより
君が膝邊に身をふせて
君が心をかくれがの
命とこそはたのむなれ

實にうるはしき君をれきて
何に黄金をのぞまましし
黄金なりけれ君こそは

かがやき渡るよるの玉

親の仰せのかしこさは
たとへば秋のしもにして
吾は野にさく草の花
花はもろくもかれんとす

父の言葉にしたがひて
朝廣丘のやどをいで
科野もこひし上つ毛や

碓氷のみねをこゑにけり

知識も富も君ゆゑに
只世に榮はあるものを
都に四歳おきふして
けふ故郷にきて見れば

門にしるしの一本の
大木の杉は碎かれて
豆葉茂れる田のくろを

きぎとなきゆく燕かな

露にひらめくいなづまの
夢なりけりな世の中は
仰げば空をとぶ星の
何れか消えぬうつつなる

袂ふかれて秋風に
夕暮しばしさ迷へば
脊戸の細道小板橋

そこにさみしき車屋の
萱の軒端の木の陰に
妹が姿も見るがごと
ふりさけ見ればおぼろおぼろ
夕月夜にもなりにけるかな

野調

ふる里の秋の花野のつゆの岡姉にねばゐ
しその星の名よ

よひよひの夢に見ゐつる故郷のこやさな
がらの並松の山

秋草を愛しみあはれみふるさとの夕べの
野路にたちてわが見し

古寺の杉の梢ゆたほひくる闇の夜の手に
われゐたゐんや

野ばらさく夕べの岡にたたずみて西に流
るる雲のかげ見る

夕くれの畑の中道とある家の梭のひびき
に吾れたたずみぬ

秋草の花さく野路に拾ひつる藪陰小星や
さしくありけり

大鳥の双の翼のはたたきにやみの夜のか
げ野に山に滿つ

夕ぐれの雲のゆきかひけだしくはわが待
つ春子のこよひ來らしも

出で湯わくあらら松山その山の松の梢に
くものくづるる

地の神に勝ちにてかへる天の神の舞樂の
あやか七色の虹

七色のあやの大弓あめつちのよりあひの
そらにたれかたばさむ

快樂の子はやもかけり來世の中のひとや
の闇にわれえたゐんや
捕へざる望みの影のあとおひて世人のみ
ちに息づくわれは
歡樂のうたげしづまる朝明けの空のなご
みに虹あらはるる
權力何黃金はた何君が胸の瑞の王國し尊
くありけり

秋草のつゆに醉ひなく虫の歌其の野の樂
に幸を見るかな
うるはしき夢に笑むなるおさな子の眉の
和毛に小さき神とぶ

明治三十五年二月十二日印刷
明治三十五年二月十五日發行

定價金廿五錢

東京市日本橋區大傳馬町二丁目廿一番地
發行者　伊藤時

東京市淺草區黑船町廿八番地
印刷人　岩田鋼之助

東京市日本橋區大傳馬町二丁目廿一番地
發行所　文友館

東京市淺草區黑船町廿八番地
印刷所　東京並木活版所

不許複製